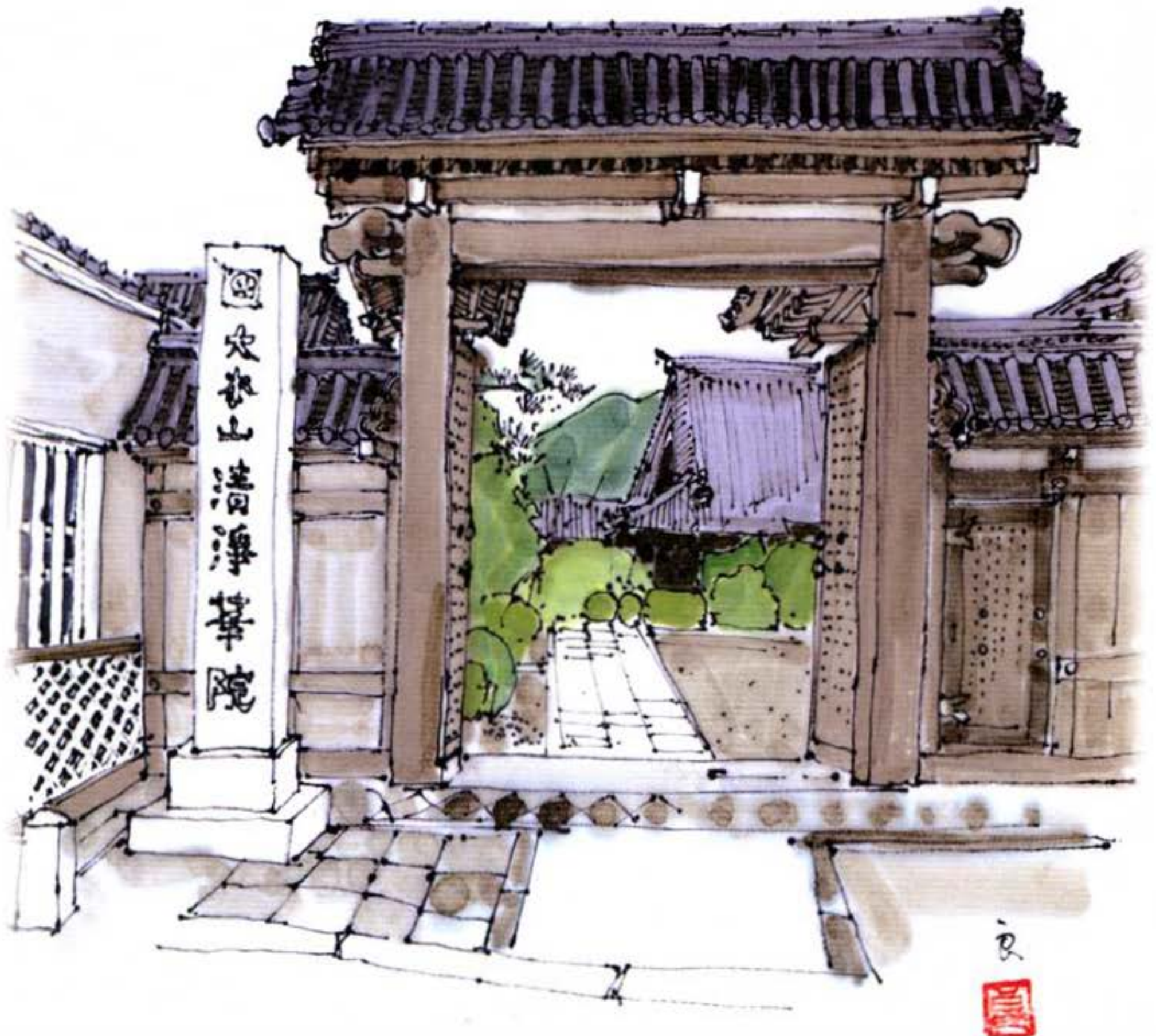


# 浄土

monthly  
JŌDO

9

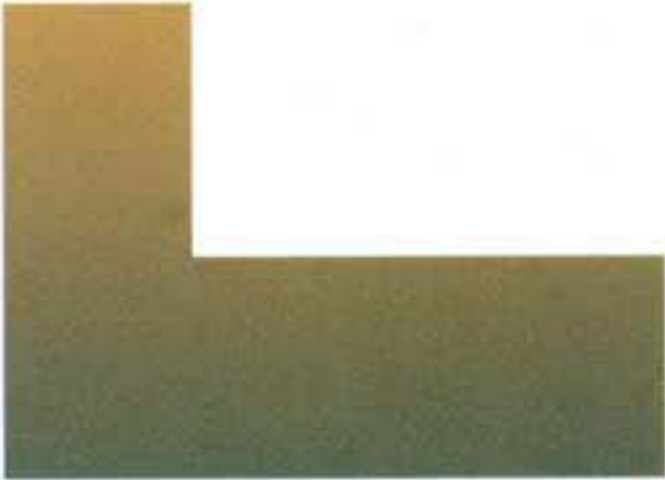
September 2007





智者のふるまいをせずして

ただ一向に念佛すべし



（一枚起請文）

# 浄土

2007/9月号 目次

|                           |          |    |
|---------------------------|----------|----|
| また会いましょう「阿弥陀経」という物語 ..... | 松涛哲二     | 2  |
| 表紙の言葉 .....               | 桜井良夫     | 9  |
| 小笠原諸島父島への新寺建立 .....       | 森 俊英     | 10 |
| 江戸を歩く 第九回 .....           | 森 清鑑     | 20 |
| 響流十方 .....                | 林田康順     | 30 |
| 会いたい人 山田太一さん③ .....       | 関 容子     | 34 |
| Jフォーラム .....              |          | 43 |
| 浄土誌上句会 .....              | 選者＝増田河郎子 | 44 |
| マンガ さっちゃんはねっ .....        | かまちよしろう  | 47 |
| 編集後記 .....                |          | 48 |
| 教えと法話 .....               | 生野善應     |    |

表紙題字＝前浄土門主 中村康隆猊下  
アートディレクション＝近藤十四郎  
協力＝迦陵頻伽舎



会また  
いまた  
しよろ

『阿弥陀経』という物語

東京・浅草・長松寺住職

松涛哲二

「だから、そこで、きつと、また」。なんだと思いますか。このそれぞれの言葉の後に「会いましょう」という言葉をつけます。「だから会いましょう。そこで会いましょう。きつと会いましょう。また会いましょう。」となります。

これは私が考案したもので、お檀家にも勧めているのですが、『阿弥陀経』を読むときに、これを文章の合間に入れて読むんです。つまり、「舍利弗よ、何故、かの仏国土を極楽と名づけるかというに、その仏国土の人びとは、なんの苦しみもなく、ただあらゆる楽のみを受けているからである。」と読んだら、その後「だから、会いましょう。そこで、会いましょう。きつと、会いましょう。また、会いましょう。」と補います。「また舍利弗よ、極楽世界には七重の欄干が廻らされ、七重の宝石の網で覆われ、七重の宝樹の並木が立ち並んでいる。」と読んだら「だから、会いましょう。そこで、会いましょう。きつと会いましょう。また、会いましょう。」と補います。「また舍利弗よ、極楽世界には七宝の池があるが、なかには八つの功德を持つ水が充ち満ちていて、池の底には金の砂が敷き詰められている。」「だから、そこで、きつと、また……」と読んでいくんです。どこで区切るかは自由なんです。不思議と最後までこの方法で読んでいくことができます。一度試してみてください。こんな風に『阿弥陀経』を読んでいくと、心が本当に温かくなってきます。『阿弥陀経』に限らず、浄土教のお経は、この言葉を補って読んでいくことができます。

## 信じるということ

今日は、『阿弥陀経』という物語について考えてみましょう。「物語」という言葉を使っ

ただけで、眉をひそめる方もいらっしやいますが、ここは少しの間、我慢してお付き合いをしていただきたい。

さて、『阿弥陀経』には誰もみたことのない世界のこと書かれています。誰もみたことがないので、証明することができない、ですから信じるしかないわけです。そこで、「信じろ。信じろ。」となるのですが、はたしてそのような取り組み方でいいのでしょうか？ 実際、闇雲に信じるという所からは、後にも先にも一歩も動けないように思います。動き出したとしても、そこからあてもなくとりあえずの方向に向かって歩み出すということになります。とりあえず、モーレツに勉強してみる人、忙しくいろいろな行事に参加してみるという人、こういう人はとりあえずにしても、まあ良い方向です。一方、やたらに気合いを入れる人、自分の中に物語を作って納得しようとする人、お坊さんの場合、仕事だと割り切って考えないようにする、となるとちよつと問題です。また、素朴な疑問を持つことが禁じられたことのように考え、疑いを持たないように持たないようにしたり、特殊なもの、より特殊で秘密めいたものに解決の期待を込めていくとなるとちよつと深刻です。

いずれにしても、心の中の問題はいつこうに晴れてはいない。多くの場合信じるということが置き去りにされているからです。うなずくことのない信は、狂信です。人間を苦しい立場に追い込みます。私は無理矢理に「信じろ」という必要はまったくないと考えています。すべての人間は、『阿弥陀経』を読んでお互いにうなずきあえると思っています。『阿弥陀経』の心をしっかりと受けとめる所から出発すべきです。

## 現実の死を前にして

私は、『阿弥陀経』の心は、人間の幸福という点にあるんだと思っています。それもやがて必ず死が訪れる人間の幸福という点にあるんです。人間は一人では生きていけません。いろいろな人々、場所、物とつながりを持つことによって始めて人間として、人間らしく存在しているのです。そのつながりを自覚することは温かいことです。その温かさ優しさを感じる所に人間に共通の幸福があります。つまり、「これらの人びとの中で、この場所で人生を過ごせて良かったなあ。人として生まれてきて良かった。」という思いです。その思いが、阿弥陀経の中心、浄土のお経の中心にはあると思うんです。

その幸福で温かい血の通った人間に、必ず圧倒的な死というものが訪れるところに、『阿弥陀経』という物語が生まれたと考えています。このように言いますと、その死を受容するため『阿弥陀経』が成立したという方向に話が進むように思われる方もいるかと思いますが、実はその反対なのです。この点が重要です。注意していただきたいのですが、『阿弥陀経』は、決して死を受容しようとするものではないということです。死を受容するということは人類の永遠の課題です。永い歴史の中に精神史としてその足跡が残されています。それはいくつかの型に整理できます。今、私流の整理に従って説明してみよう。

第一に、代表選手は、これも運命だからしかたないという運命論で死を受容する。次ぎに、望遠鏡的視点で自己を見るといふもの、宇宙の果てから望遠鏡で自分を見てみると、時間的にも空間的にも点のように取るに足りないものだ、消えてなくなるのなんて当たり前だという納得。次に、生命一般の同質性、つまりみんな死ぬんだという当たり前のこと

を当たり前に受けとめる納得。その次に、脳の停止が死であるというドライな考え。脳の停止によってすべて感覚や思考が停止するのだから何も心配いらぬという納得。次には、死をイベント的に捉え、人生の一大事を立派にやり遂げようと決意する納得。日本人は行儀が良くこう考えて死という事態に取り組もうという人も多い。最後は、マンガ的受容といいますが、死ぬまでは生きているんだという納得。聞かれてこう答える人は少ないと思いますが、実際にはこう考えている人が多いのかも知れません。みなさんはたしてどの型でしょうか？ ちよつと考えてみてください。自らがいずれ死を迎えるということを、どんな風に自分に言い聞かせていますか？ この他にもあるかも知れませんが、浄土の教えはこれらの考えとは違います。どういう事かと言うと、これらの受容は自分に言い聞かせるためのものです。だから、今まさに亡くなるうとしている人に向かつては言えません。「これも運命です。」「みんな同じですよ。」「脳が停止するからだいじょうぶ。」「立派にやりとげましょう。」「どうですか、今まさに亡くなるうとする人に向かつて言えますか？ 言えませんか。口が裂けても言えません。このことから解るように、これらの考えは自分一人に言い聞かせる納得なのです。圧倒的な死の前では役に立ちません。人間は温かいつながりの中で幸福な人生を送っているのです。その幸福な人生を肯定してくれるものが必要なのです。

## 『阿弥陀経』の成立

自らが、今まさに死を迎えた時を考えてみてください。死に対して人間は全くの無力です。生きるための知恵しか持っていないません。死についての知識はほとんど想像だけでゼロ

と言えます。全く無力ですが、そんな人間が最後のとき、手を握って送ってくれる人がいたら、どうでしょう。あなたなら何を言いますか？ 私は、「きつと、また会いましょう」と言います。それは思わず結ぶ約束です。温かい血が通い、人生を幸福に過ごした人間ならば、再会の約束をします。この約束のドラマが浄土の教えを支えています。往く人も送る人も思わずうなずきあって約束します。それは、まだ見たことのない世界ですが、七重の欄干があつて、宝の網で覆われた宝樹の木があつて、八つの功德を持った水の池があつて、苦がなく楽ばかりの世界です。そこで再会しましょうという約束です。ここからが信仰の世界です。死というものをまっすぐに見つめることなしに浄土の教えは成り立ちません。圧倒的な死と向かい合つた無力で小さな人間を直視しないといけません。ここに阿弥陀経が生まれたのです。

さて、前にあげた納得とどこが違うのでしょうか。そう、人間同士がうなずきあうという点です。だから、ありがたいのです。このような教えは他にありません。自分一人で勝手に想像して納得しているのとは違います。あの世で再会を願う心は人間が二人になったときに成立しています。人間が社会性を持ったときに成立しています。それこそ、お釈迦様以前にもあの世で再会を願う心は幸福な人間同士のあいだに成立しています。そして、大昔からこの見送りのドラマを人間は無数に繰り返してきたのです。無数という言葉は平板で実感が沸きにくい。常に今も繰り返してる、これからも永遠に繰り返していくと付け加えた方が良いかもしれません。このように考えると、『阿弥陀経』という物語が本当に身近に温かく優しいものとして実感できます。

このような実感から浄土の信仰を出発させていくのが良いのではないのでしょうか。また

会いたいと思っただけで約束することです。『阿弥陀経』の心を感じ取ることが先です。それから、苦のない再会の世界を感じ取ります。そして、その心を感じ取ったら、今この時にそれを活かします。きっと会いましょう。また会いましょうという気持ちで、今、この時に目の前の人とお互いに人生を作り上げてゆきます。『阿弥陀経』が我々に教えてくれている生き活きとした人生の歩み方です。このように、われわれの人生すべてを肯定してくれるこんなありがたいお「経」は他にありません。

小さい頃、友達と遊んでいて、別れ際に「また明日会おうね」といって別れました。暗くなるまで遊んで、おもしろかったんですね。今考えると幸せだったんですね。思わず当然のように、また会おうと言っていました。お互いにです。幸せで生き活きした人間同士の言葉は、きっとまた会いましょうです。

また会いましょう

きっと会いましょう と

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

まっなみてつじ

平成十九年一月 鈴木出版より

『きっと会いましょう』

現代人のための極楽浄土』

(A6判 二八二ページ)を上梓

表紙の言葉

え  
桜井良夫

9月

京都

清浄華院

上京区寺町広小路上ル。浄土宗の七大本山の一つです。清和天皇の勅願により、京都御所の内に建造され、御祈願などの清浄の業を精勤したといいます。とき貞観二年(860)頃のことでありました。のち高倉天皇の時、法然上人に勅授され浄土宗の寺院として発展しました。天正年中(1573～92)に至り豊臣秀吉によって御所内から現在の寺町に移されました。明治維新後も数人の皇族の位牌を供養しましたが、陵墓は宮内省くわいしやうの所管。略称、浄山じやうざん、呼び名も普通「じょうけいん」として、親しまれております。

# 小笠原諸島 父島への 新寺建立

吉田一心師（新寺建立）を支援する会  
事務局・大阪正明寺副住職

森 俊英

## (一) 発願から移住へ

芝・増上寺から南へ約2kmの竹芝港から、6日に1便の船が出る。片道25時間半の航海を経て小笠原諸島へ到着する。そこは時間的には、国内で最も遠いところかもしれない。

その小笠原諸島・父島に浄土宗僧侶・吉田一心上人が住む。吉田上人は、平成15年11月末まで三重県・南龍寺の住職であった。私は知恩院布教師会で知り合い、とても刺激的な人だと感じた。以前はスキューバダイビングの指導者養成校の校長先生であったと聞く。だから「自然」について大変詳しく、また物事を他人に伝えることに長けている。このような人が浄土宗僧侶となり、しかも布教に熱意を示されたわけだから、仲間として大いに喜び、そして励みとなった。

45歳で僧侶を目指し、五年後に住職就任。そして八年間住職を務めた南龍寺を後継者に託し、吉田上人は父島に行く仲間を発表した。

小笠原諸島は、僧侶が不在で葬儀の時も困っているという状況を現地の知り合いから聞き、移住を決意。とは言っても入るお寺があるわけでない。アパートに住み、島の方々と相談しながら、新しくお寺を建てるという発願であった。吉田上人は当時58歳。発願はす

ばらしいが、現実として可能か、実現しても維持できるか、など私たち仲間も種々の意見をもった。吉田上人曰く、

「実現できるか、維持できるか、想像ばかりしていても何も進まない。実際に困っている人がいるなら、私は行ってみる」と。

有志が集まり送別会が開かれた。吉田上人の挨拶は、

「与えられたご縁をしっかりと努めたい。法然様は、身命財を投げ捨てて教えを説き広めるべしと仰った。私には財は無いし、命を捧げるほどの勇氣もない。せめてこの体だけは賭けてみたい」

続いて乾杯に立ち上がった上座の僧侶が、集まった仲間の思いを次のように語った。

「法然様のお言葉に忠実でありたい。今の私には、守るべきお寺と家族があり同じことはできないが、吉田さんは体を賭けて行こうという。せめて後押しはさせていただきたい」

## (二) 支援する会設立

送別会の幹事が、そのまま世話人となり、吉田上人を支援する組織を作ることになった。送別会での思いを多くの人に広げたいと意気込んだが、最初は何から始めてよいかわからない。当の吉田上人は送別会から半月後に、予定通り父島に旅立っていた。

そうした折、大阪の重鎮、白川元昭上人から、

「吉田さん支援のことを聞いた。開教は苦勞が多い、私にも応援させてほしい」との有難い連絡が入る。白川上人は若い頃アメリカで開教を経験し、食べることにちもご苦勞されている。

私たち世話人は支援案を練り書類にまとめ、白川上人に読んでもらった。上人はその書類にご自身の文章と返信ハガキをも付けて、ご縁の深い僧侶方に送られた。後日、上人から返信ハガキの束がこちらに届く。そこには、第一線で活躍される方々のお名前と賛同の言葉があった。それ以降、支援体制は一気に整う。アドバイザーとして、石田祐寛上人（埼玉）・白川元昭上人（大阪）・林田康順上人（神奈川）を迎え、そして全国から八十名以上の賛同者のお名前をいただく。

平成16年4月5日、「支援する会」が正式に発足し、本格的な活動を開始。全国からの反応は篤く、世話人であり事務局の私は無我夢中で対応した。

一方、父島の吉田上人は、島民による「新寺建立発起人会」を興し、建立地探しを始める。そして、全国各地への挨拶・布教に奔走することとなる。

全国をまわる勧進行の行程は「支援する会」で作るが、経費節約のため青年僧でも音を上げるようなスケジュールとなる。還暦前、しかも腰痛を氣遣う吉田上人を知りながらも、かなり無理をさせて

平成19年1月22日 大阪府高石市  
南海福祉専門学校での講演



平成17年11月13日 JR草津駅(滋賀県)にて  
勸進中の吉田一心さん



小笠原の中心・父島は東京から南へ1000km。  
沖縄本島とほぼ同じ緯度にある。  
東京から父島まで船で26時間。飛行機はなく、  
船便は6日に1便。

しまった。長期に亘るホテル生活、朝、目が覚めたとき自分が今どこに居るのか解らないことがあり、広くはないが父島のアパートがとても恋しく感じた、などと吉田上人は後に述懐される。

しかし、各地のご寺院・檀信徒の皆様は吉田上人を、本当に温かく迎えてくださった。

はるばると 父島からの 十夜僧

山口県・智願寺様の十夜法要にて、檀家の関本久代様がこの俳句を詠まれ、それは朝日新聞に掲載となる。

厳しい勸進行の連続ではあるが、吉田上人は多くの善き思い出を心に刻む。

### (三) 苦難をこえて

こうして支援の輪は宗内外へと飛躍的に広がり、浄財も三年間で六〇〇〇万円を超えた。そして父島においては、葬儀・年回法要・お墓回向がつとめられ、吉田上人と島の方々が読経・念仏を唱和されている。万事順調にもみえるが、やはりいくつかの苦難は生じる。中でも世話人を悩ませたのは「風評」であった。大きな事業を行う以上、様々な障害は覚悟していたが、こういう形で現れるとは考えもしなかった。

「吉田上人は、お金を集めて父島でダイビングの店をやるらしい」

というものから始まり、多々の風評が僧侶間に広まる。

#### 好語不出口 悪語傳千里

という諺があるが、まさにその通りとなる。支援の輪が弘まることに呼応するかのように、吉田上人の人格に関わるものまで語られるようになった。『他人の悪口は嘘でもおもしろい』というのがこの世かもしれない。世話人もショックを受けたが、当の吉田上人の心中、いかばかりであつたろうか。まさか憧れて入った仏門でこのような目に遭うとは思わなかったであろう。寺に生まれ育った私は、なにか申し訳なく恥ずかしい気持ちになった。

しかし、後向きなことに心を奪われてはいけけない。多くの支援者から「本来の目的を見失うな。お寺を早く建てて教化活動を進めることで風評を乗り越えなさい」と励ましを受ける。確かに新寺ができれば、島を訪れる人も増えるであろうし、そうすれば風評に根拠が無かったことは明らかとなる。

堂宇の設計は小笠原を知り尽くした渡邊章様（一級建築士）をお願いしている。支援者でもあり、諸事情を理解される渡邊様が、建設業者と懸命な折衝を重ねてくださり、遂に工事はスタートとなる。

#### （四）夢の共有

本年5月、いよいよ地鎮式。新寺を支えてくださる三名の総代さ

んをはじめ、島の方々、建設業者の皆さんが集い、厳粛につとめられた。ついに着工となったが、総予算に対し浄財が十分でない。順調に進めば竣工は年内である。設計士様の熱意に応えるためにも、吉田上人と世話人はこの秋、最後の勧進行に臨む。

ふり返れば、勧進行脚も20回目を迎え、各地の理解者のあたたかい協力に支えられていることに気づく。

あるご住職はホテル住まいばかりは大変であろうと、お寺の一室を開放し、いつでもどうぞと仰ってください。朝、一緒におつとめをし、朝ごはんもご家族とともに囲む。吉田上人は今回も、その日をとても楽しみにしている。

この方は勧進中の吉田さんに会い、ゆっくり話を聞いた後、「私もその夢に乗りましょう」と賛同の意を表された。父島に新寺建立発願という大きな夢は、多くの方々に共有されながら育っているように感じる。

新しいお寺は「行行寺」（念仏の行を行じる）と名付けられ、すでに本尊様もおいでになる。はるか2000km離れた島根県からのご縁である一光三尊弥陀如来様は、今、吉田上人のアパートで遷座の日をお待ちである。

あの送別会の日より、早4年を迎える。私たちの活動の基礎を作ってくださった支援する会アドバイザー白川元昭上人は、今、極楽

浄土においでになる。闘病中の白川上人に幾度かお会いできたが「早くお寺を見せてくれよ」と仰った温和な表情を忘れない。堂宇完成そして落成記念法要までは、アドバイザーの席にお座りいただきたいと願っている。建立がこの世で間に合わなかった分、お念仏とともにご報告申し上げる日を急ぎたい。

吉田上人は今、建設作業を見守りながら、建立後の活動を思考している。島の人々だけでなく、全国からの参拝者を対象とした「仏教修養講座」開設がその一つである。豊かな自然の中で魅力的なプログラムが展開されるであろう。

片道25時間半の船旅は、現代人に不思議な開放感を与える。心の修養には、「遠いところ」はとても良いことなのかもしれない。

物心ともにこれほど多くの人々に支えられ、建立されるお寺も稀である。建立後の行行寺は、人々に新たな夢を見せてくれるのではないかと期待している。

合掌

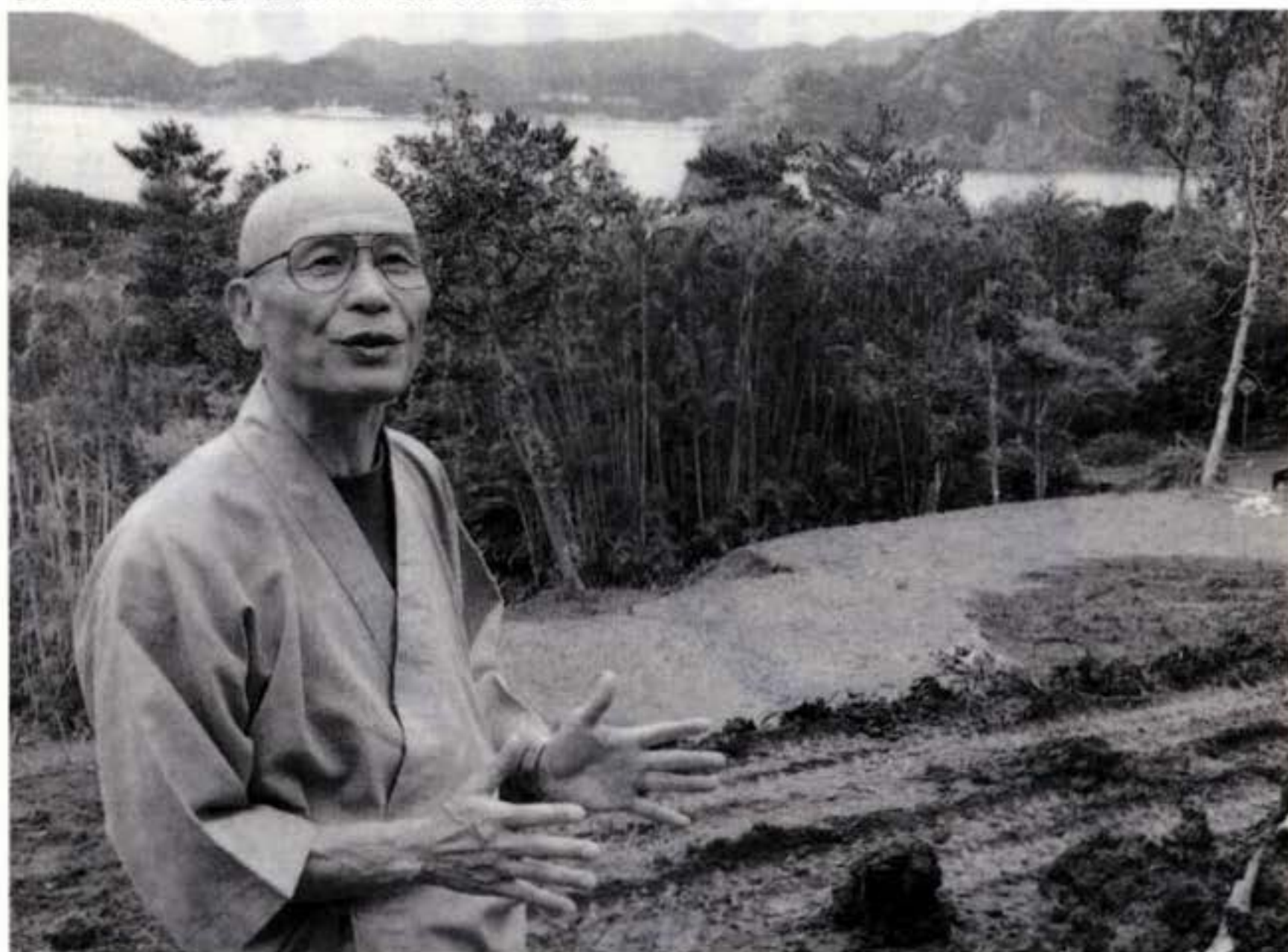
吉田一心師(新寺建立)を支援する会

〈アドバイザー〉 石田祐寛 故白川元昭 林田康順

〈世話人〉 伊藤法雄 日下部謙旨 森俊英

〈事務局〉 大阪府堺市堺区新在家町東4-3-15 正明寺内 森俊英

平成19年5月24日 父島建立地にて  
うしろには二見港・おがさわら丸もみえます。



小笠原諸島・父島新寺建立(行行寺)の建設  
状況をインターネットにてご報告しております。

[http://blogs.yahoo.co.jp/ogasawara\\_gyogyoji](http://blogs.yahoo.co.jp/ogasawara_gyogyoji)

または「支援する会」の事務局(正明寺・森)  
のホームページ(下記)からもご覧いただけます。

<http://homepage3.nifty.com/sho-myō-ji/>

# 江戸を歩く

九品仏から目黒へ

第九回

田園編



森 清鑑

大江戸ウォーカー

## 浄真寺から洗足池へ

浄真寺の参道を出て目の前の道を左、すなわち東方向に歩く。これが旧道である。道の北側一帯は九品仏川を挟んで豊穡な田んぼ。字城向、字鷺の谷。九品仏川を軸に広大な田んぼが続く。この道の南側は、畑が多い。次第に竹林が多くなり、字八幡前、八幡宮（自由が丘駅裏側の奥沢神社）。さらに行くと南下してくる九品仏川にぶつかる（緑が丘駅前）。この川は北（都立大学）から南に下る呑川と合流する（東京工大付近）。この地帯も清流を受けて、稲がたわわに実っている。九品仏川を渡ると、道は北上し、東に向きを変え、呑川を渡って清水窪に達する（北千束、環状七号線南の大岡山北口商店街近辺）。広大な田園地帯をいくつも農道が縫う。環七から、南すぐに位置する清水窪は、現在では、想像もつかぬが、江戸期には、秘境であった。尤も、環七の上馬からこの辺りに続く道は、

山の尾根伝いの旧鎌倉道で絶景の地でもあった。昭和二十年代でも、上馬、野沢から櫛などの古木が立ち並び、秋ともなれば、狭い尾根道に枯れ葉が十センチも積もり、大木越しに目線で渋谷の建物が見え、西を見れば、富士山が間近に迫って見えた。正に、山の尾根。清水窪は、湧水池で、崖からも清水がこぼれるように吹き出、その清流が洗足池に流れ込んでいた。清水窪弁財天の由来によれば、「江戸時代には、鬱蒼とした杉の森で、昼でも天日を見ることができないくらいであった。靈気はもの凄いまでに強く、邪心を捨てて一心に念願すると、不思議と願い事が叶えられるので、遠近各地からの信仰者が絶えなかった」。今では小さな存在であるが、それでも弁財天の周囲には、神秘的な雰囲気が漂っており、流れ出る水は、地下導管を通じて南に下り、洗足池北側では表面に出て川となり、池の周囲を巡って流れ込んでいる。

◆清水窪井財天。左下清水が湧き出る。樺の大木。



◆井財天由来の立て札。その昔、白蛇がいた。

江戸期には清水窪の豊富な湧水は辺り一帯を潤し、南に駆け下りて洗足池を形成した。しかし、洗足池そのものも湧水池であった。清水窪を初めとする四本の川がこの池に流れ込み、大池おおいけとなったという。この辺り一帯が湧き水豊富地帯であり、それが近隣の田畑を潤し、豊潤な実りをもたらした。大池の周囲一帯は平安末期から千束としての地名を留めている。江戸時代、その風光明媚なことは希有の存在で、広重も江戸郊外の、この美しさを描いている。池の手前、人々が佇む道が中原街道で、左に行けば、玉川丸子の渡し、右へ行けば、江戸市中。家康は、江戸入府の際に、この道を通ったという。さぞかし、洗足池の美しさに目を奪われたことであろう。海岸沿いの東海道が整備された後も西の丘陵地を抜けて江戸に入る要路であった。池より半里南に下れば、日蓮上人が入滅した池上本門寺。その前を通る池上道を行けば大森を抜け品川の宿。この三本が江戸に入る要路である。

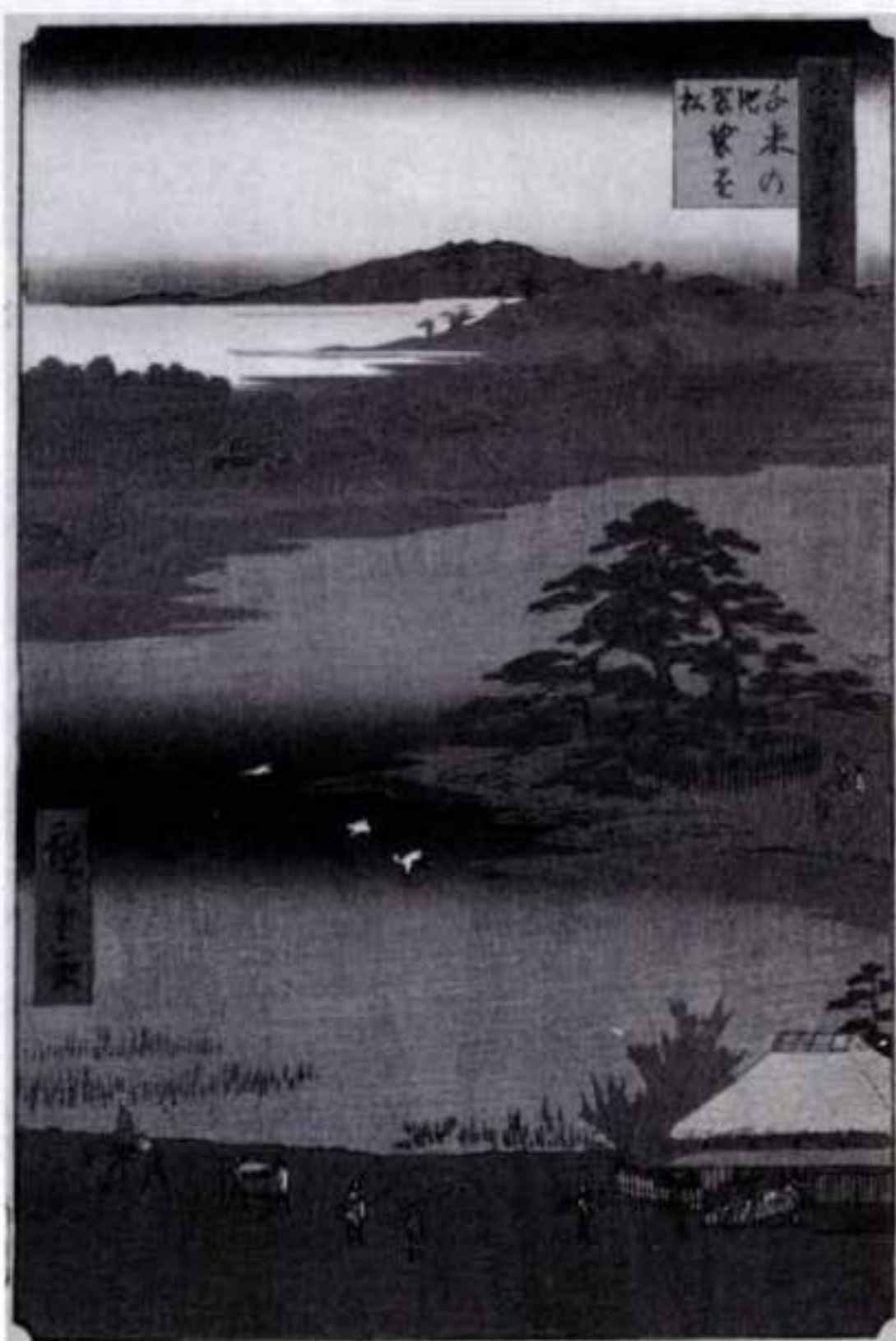
広重の絵は、池湖畔に突き出た、袈裟懸けの松をスポットに描かれている。日蓮上人が常陸の国に温泉治療に赴いた際、池の畔で休息し、袈裟を松に懸け、足を洗ったという伝説が残されている。以来、人々はこの伝説に基づき洗足池と呼ぶようになった。自然と解け合った瀟洒な妙福寺の門の左側には、「御松菴」の古い石塔が建てられ、その由来が記されている。門を潜ると、左側は竹林で、さらに進むと池のほとりに三代目の松がある。

洗足池といえ、勝海舟である。幕末、池上本門寺に陣を取る、西郷隆盛との会談で、海舟は人目につく東海道や池上道を避けて中原道を利用した。ここから南東に下れば池上本門寺。そこで度々、この池周囲の景色に感嘆し、ついには、池の畔に別荘、千束軒（大森第六中学校、妙福寺前）を建てた。土地を求めるには、親しい友人、津田仙（津田塾大学創始者津田梅子の父）の仲立ちがあった。

◆清水窪からの清流が洗足池に流れ込む。



◆広重画。洗足池。中央が袈裟懸けの松。下に、中原街道。茶店。



その後の管理も処の人々が率先して行ってくれたという。ここのがいかにも海舟らしい。「池のにも、月影清き今宵にも、浮き世の塵の跡だにもなし」。維新後、海舟は海軍卿や枢密顧問官にもなった。教育者として偉大な福沢諭吉は、咸臨丸でも海舟と接しており、その人となりを十分に理解していたのであろうが、「やせ我慢の説」で徳川の最高責任者の立場でありながら、その後の明治新政府で地位を得ていることに異を称えた。福沢は本を送り感想を求めた。その時、発した海舟の一言。「行蔵は我に存す。毀誉褒貶は、他人の主張、我に与らず」。つまり、この意味は、「自分は義の真理に基づいて行動している。その責任は自分で取る心構えだ。褒めたり、貶したりの評判は、他人がすることである」。この心構えが無ければ、あの激変情勢の渦中で江戸百万の市民を戦渦から守り、幕藩もなにもない、日本という国の行く末が義の根本であると維新時に動いた、海舟の信

念を到底貫くことはできなかつたであろう。海舟は、維新時、何度も襲われ、人格形成期に島田虎之助から授かった、猛烈な剣術修行により、丹田、命門の使い方を心身に具していたから、難を逃れ得たのだと思う。一方、福沢は、居合い抜き名人でもある。文官でありながら、その技術は、剣豪排出の世相を反映している。慶應義塾で生徒達の学業の息抜き時に、皿を投げさせ、目にもとまらぬ早業で切ったという。福沢は、その後、二度と海舟に痩せ我慢の説を迫っていないし、海舟も本心は福沢の真価を認めていたのであるう。

明治三十一年暮れに、「俺はもう七十七歳になるよ。俺の銅像を建てる？ そんなものはいらねえ。銅像なんか時世が変われば、何時、鉄砲の弾に铸られるか、わかりやしねえ。今のうちにその一部でもいいから金をもらいたいよ」と一笑に付した。自分のやったこと

の跡を消す。これが、海舟の生き方である。明治三十二年一月十九日、夕方、入浴後、「胸が苦しいから、ブランデーを持ってきてくれ」と家人に頼み、一口飲むと倒れた。二十一日の夕方、息を引き取った。旧幕臣の戸川は、赤坂に馳せた。すると頭巾の婆さんが枕元にいた。海舟の妹の順子で佐久間象山の妻である。順子は言った。「なにも言いませんでした」が、一言『これでお終い』と申しました。山田風太郎のギリシャ時代から始まる、世に貢献した人物の遺言集、「人間臨終図巻」からすれば、古今東西を問わず、遺言の最高傑作であるということになる。人生は、かくありたいものだ。ちなみに、銅像を建てたいといったのは、東郷平八郎を運が良いからと司令官に起用し、日露戦争を勝利に導いた、海軍育ての親ともいわれる、山本権兵衛である。彼は、青年時代、赤坂の海舟邸で書生として、海舟の訓育を受け、海軍を志した。戊辰戦争直後に、西郷が海舟のもとにこの青



◆勝海舟千束軒跡。

年を送り込んだのである。維新展開の立役者、坂本龍馬が、海舟のもとから育ったのと同様に似ている。山本は西南戦争で西郷のもとへ馳せ参じようとした。しかし、西郷は来てはならぬと厳命した。

生前、海舟は、「自分は、富士を見ながら、土に入りたい。あの池の辺に埋<sup>い</sup>けてくれ」と述べた。この遺志に基づき、千束軒の目の前、池の畔に墓が建てられた。維新に関わりのある当事者の大多数が青山墓地や谷中霊園に葬られたが、一人、海舟は洗足池の畔に眠っている。夫妻の墓には何時行っても花が上がっている。墓石の勝海舟の文字は、慶喜の筆という。晩年、海舟は、広尾の有栖川親王の元に赴き、徳川慶喜の恩赦を願い出た。そして、全てがきつちりと水に流されたのである。慶喜はそこまで考えていてくれたかと涙をながしたという。慶喜の十男、精<sup>とく</sup>が海舟の養子となった。日本人で初めて、米アナポリス、



◆妙福寺山門。左に「日蓮上人袈裟懸けの松」の碑。

◆勝海舟夫妻の墓。何時行っても花が。



◆洗足池。

海軍兵学校に学び、将来海軍を背負って立つはずの実子、勝小鹿の病死をおもんばかっての慶喜の心である。

海舟夫妻の墓の隣には、西郷隆盛留魂碑がある。これは西郷の死を知って、海舟が葛飾の寺に自費を投じて建てた碑である。大正二年、荒川の改修工事のため、洗足池の海舟墓の隣に移された。その漢詩からは、隆盛の「無私精神」がひしひしと感ぜられる。全域に清々しい意念が漂う。

池の西岸に八幡神社がある。清水窪から流れ込む川の直ぐ側である。石橋山の戦いに敗れた頼朝が再び挙兵して鎌倉に向かう途中、この池の畔で宿営した。その時、駿馬が捕らえられた。名馬「池月」である。神社は頼朝の決起を奉っている。洗足池には、多くの先人達の遺志が宿っている。

池の周辺には、都内では今は珍しい雑木林がある。まず、ハンの木。水辺沿いに多数ある。ムク、クヌギ、エノキ、マユミの古木。北側の丘には、ミズナラ、コナラが乱立し、近年では桜の名所でもある。嘗ての武蔵野の木々がここには平然とある。池にはカイツムリや多くの水鳥が生息する。夏に行けば、懐かしいヤンマが見られる。水生公園もある。広重が描いた絵の中原街道沿いの茶店は、海舟も良く利用した処で、今は憩いのレストランである。湖面を見ながら、ワインやイタリア料理を楽しむ。

（阿弥陀如来の）光明はあまねく十方の世界を照らして、念仏の衆生を攝取して捨てたまわず。

（『観無量寿経』「第九真身観文」）

阿弥陀さまから放たれる救いの光明は、あますことなくあらゆる世界を照らされる。そして、その救いの力を信じ、「南無阿弥陀仏」とお念仏を称えるすべての人々を阿弥陀さまは決してお見捨てになることなく摂め取り、必ずやお浄土へと導いてくださる。

「念仏の衆生」と「一切の衆生」——呼べば応える関係は？——

少子化が進み、私立大学の四割が定員割れとなっています。大学側もあれこれと智恵を絞り、学生募集に余念がありません。入試科目の削減、推薦入試の拡大など、入試制度も多様化の一途をたどっています。

しかし、大学側がどれほど間口を広めようとも、一定の書式にのっとって願書を提出するといった手続きそのものがなくなることは、今後もあり得ないでしょう。すなわち、どんなに大学側が学生を確保したくとも、志願をしていない学生に合格通知を出すわけにはいかないのです。

さらに、学生の勝手な物言いだけで入学を認めるような事態になることもあり得ないでしょう。すなわち、大学側が試験科目や試験日を指定しているにもかかわらず、学生が「僕は国語が苦手だから、得意な体育で試験を受けさせてくれ！」「〇日は都合が悪いから×日に試験を受けさせてくれ！」などと一方的に強弁されてもそれを認めるわけにはいかないのです。このように、学生を募集する大学と所定の手続きに従った学生との互いの信頼関係が成立してこそ、晴れて大学合格の通知が届くことは言うまでもありません。あたり前のようですが、こうした関係性は実は浄土宗の教えとも密接に関連しているのです。浄土宗以外のお宗旨にとって、究極のみ仏は、姿形などなく全世界に遍満し

ている真理そのもの、この宇宙の働きそのものといえます。ですから、み仏と「一切の衆生」との関係こそ基本であり、み仏と私たち一人ひとりとの個別具體的な相対関係は副次的・二次的な扱いに過ぎません。

それに対して、法然上人が帰依された阿弥陀さまは、常に私たちに光明を降り注ぎ、「わが名を呼べ」と呼びかけられ、それに応えて私たちがお念仏を称えれば、必ずや私たち一人ひとりをお浄土にお導きくださるという相対的呼応関係が成立するみ仏であり、そうした関係こそ第一義なのです。

かつて、阿弥陀さまはお念仏を称える者を救うという浄土宗の教えを非難して、次のような和歌が詠まれました。

阿弥陀仏にまことの慈悲はなかりけり　　すがる衆生を分けて隔つる

「阿弥陀仏にまことの慈悲はない。なぜなら、誰しも人は救われたいと願っているにもかかわらず、阿弥陀仏は念仏を称える者だけを選び分けて救いの対象としているからである」と。浄土宗の教えの根本をわきまえない、こうした身勝手な物言いに對し、次のような返歌が詠まれました。

阿弥陀仏に隔つ心はなけれども　　蓋する桶に月は宿らじ

「そもそも阿弥陀さまに人を選び分けようとする心などあるうはずがありません

ん。月の光があらゆる世界を余すところなく煌々と明るく照らし、桶の水に月の姿がクッキリと映し出されているように、阿弥陀さまの救いの光明もすべての人々を救いたいとあらゆる世界を照らし続けておられます。しかし、どんなに月が明るく照らしていても、蓋をされてしまった桶の水に月が映し出されることがないように、阿弥陀さまの大いなる慈悲のみ心を正しく受けとめようともせず、愚かな凡夫が自分本位に受けとめて、お念仏を称えなければ、阿弥陀さまの救いにあずかることはできないのです」と。

こうした和歌のやりとりが教えてくれるように、ともすると、阿弥陀さまの大いなる慈悲のみ心を受けとめもせず、わが身の程を省みもしない私たち凡夫は、自分勝手に判断を下し、何もしないわが身を棚にあげては「すべての人を救わない阿弥陀仏にまことの慈悲はない！」などと言い募り、あるいは、そもそも異なった目的のために修めていた行を「浄土往生の行とみなしてくれ！」などと強弁してしまい勝ちです。あたかもそれは、大学と学生との信頼関係が成立していないようなものです。冒頭の経文に、阿弥陀さまは「念仏の衆生」を必ずやお浄土へと導いてくださると説かれているのであって、「一切の衆生」をお浄土へ導くとは説かれていないのです。

合掌（林田康順）

連載

# 会いたい人 関 容子



山田  
太一さん

3

撮影／タカオカ邦彦

監督木下恵介、主演高橋貞二の『この天の虹』という映画は、浅草国際劇場のSKD（松竹歌劇団）公演を観に行つて、そのとき偶然に観たが、この映画の新入りの見習い助監督は山田さんだった。

「八幡製鉄でロケをしたので、小倉に延々といましたね。巨匠の仕事ぶりというのは、今日は空に雲がないから撮影はナシだとか、それはぜいたくでのんびりしたものでした。それから何年かして『永遠の人』という作品で木下組につかないかと言われたとき、ぼくは大きな組は気に入らない、って断わろうとしたら、吉田喜重さんがぼくを片隅に呼んで、そんなこと言うもんじゃない、一流の人にはそれだけのことがあるから、って。それで途中からつきました。高峰秀子さんが佐田啓二さんとは身分違いで結ばれないで、足の悪い仲代達矢さんと結婚する。妻はなかなか夫に心を開かない、という、ちよつと日本の情緒のない話で、あとになれば、スペインとかラ

テン系の田舎の話だと考えると自然な印象で、それなら音楽にフラメンコを使つてたのも納得で、やっぱいい勉強になりました。木下さんにはとても大事にしていただいて、あるとき、ぼく松竹やめるけど君も来ないか、つて言われて、はい、行きます、つてすぐやめました」

木下恵介監督の独立プロに所属し、民放の「木下恵介劇場」に脚本家として活躍の場を持つようになる。

「シナリオライターになろうと思ったのは、監督というのは大勢とつきあつて面倒なわりにクリエイティブじゃない気がした。真つ白なところから何かを創り出すというのは、むしろ脚本の仕事じゃないか、と思ったからです」

山田さんが書いた『3人家族』や『それぞれの秋』が評判を取り、テレビ大賞を受賞するなどした結果、NHKの花形番組、朝のテレビ小説に執筆依頼が来た。それが『藍より



1983年TBS系で放映された「ふぞろいの林檎たち」。三人の主役を演じた俳優さんたちと一緒に

青く』（昭和四十七年）。

「ある日、中央公論社の人に来て、あのドラマを小説にしませんか、と言うんです。まだノベライズなんて話のなかった時代で、大変だとは思ったけど、午前中にドラマ書いて、午後に小説書いて、同時進行で書きました。それから東京新聞の人が来て、新聞小説を書きませんか、って。これも迷ったけど、じゃあテレビドラマでは暗いといわれて企画が通らないプランもあるからそれを、って書いたのが『岸辺のアルバム』です。そしたらプロデューサーの大山勝美さんからドラマ化の話が来て、今度は自分の作品を批評的に見て脚色したのがよかったのかもしれない」

このドラマは昭和五十二年、TBSで放映され、大きな話題を呼んだ。岸辺に住む平凡な四人家族の貞淑な妻に、ある日見知らぬ男からの電話。妻の心は激しく揺れ始める。終盤で多摩川の増水により家が流される場面は、実際の水害を報じるニュースで何回も見

たあの衝撃的な映像だった。四人の家族はそれぞれの孤独を抱えながらも助け合い、立ち直って生きようとする。日本のホームドラマに革命を起したとされる山田さんの傑作で、杉浦直樹、八千草薫、竹脇無我が好演した。

「やがて新潮社の人に来て、映像を考えないで小説を書きませんか、と言われて、ではフアンタジーをとるので『飛ぶ夢をしばらく見ない』『異人たちとの夏』『遠くの声を探して』の三部作を書きましたけど、結局は映画化されたんですけど。小説はいろいろ制約されずに自由に書くという楽しみがあるけど、ぼくはずっと映像で生きてきたから、俳優さんと一緒に作って行くという楽しみも捨てがたい。思いがけない芝居をしてくれると、こっちがびっくりするような効果が上がる。だから両方別れ難いんです」

まさに俳優との出会いによって不朽の名作となった「山田太一ドラマ」に、鶴田浩二主



1991年、紹興にある魯迅故居を訪れた。北京、西安、上海の撮影所も訪ねた

演の『男たちの旅路』と『シャツの店』がある。

「NHKから鶴田さんでドラマを、という注文があつて、当時『傷だらけの人生』という彼の歌はヤクザ礼讃の歌だというんでNHKでは放送禁止になつてたんです。鶴田さんは怒つて、NHKには出なかつたのをなんとか口説いて、というんだから最初から難しい。プロデューサー二人と一緒に自宅へ伺いましたけど、鶴田さんはずっと構えてますよね。会つてゐる間、特攻隊の話をしてるんです。大きな湯呑には、貴様と俺とは同期の桜……なんて歌詞が書いてあるのもすごいね。戦争体験に本気で浸つてゐる人なんだ、ということを感じました。この人を生かすにはこれだ、と思つた。戦争をみんな忘れていくけれども、せめて一人くらいは妻子も持たずに彼らを忘れないでいよう、と決心した男を描こう、と思ひました。それでヤクザというわけにはいかないから(笑)、警官かと思つたけど、NH

Kだといひ警官しか描けない。鶴田さんは部下を真面目に叱つたりするのが似合いそうな硬派の人なんで、ガードマンはどうだろう、と思つた。いかにも戦争の生き残りが就職しそうな感じの職業。それでこの人に普通の通念じゃない、偏見を語らせることにして、パランスを取るために若い水谷豊とかに反論させることにした。一作ずつテーマを決めましてね、若いのに自殺しようとする者とか、養老院生活の老人たちの鬱屈とか」

私は再放送もふくめて何回となく『男たちの旅路』を観ているが、笠智衆、志村喬、殿山泰治、藤原釜足、佐々木高丸……と、老名優が顔を揃えたその回には特別鮮烈な印象がある。

「老人のいい俳優さんがいっぱいいらっしゃるのに、テレビドラマが若い人ばかりになつていく。それで尊敬しているそういう方々に出てもらおうと思つたんです。皆さん楽しんで演じてくださつて、ただ感謝してます。

視聴率的にも当たったので、毎年やらないかという話になったけど、そういう時がやめ時じゃないかと（笑）、鶴田さんが若い桃井かおりさんを好きになって、その娘が死んでしまつて彼が姿を消す、って話を書いた。つまり恋愛を書くんじゃないで、どうやって鶴田さんを消すかで書いた。そしたら今度は若い者が彼を見つけ出して連れ戻す話を、と言われて、また続けて、最後にスペシャル版を書いてやつと終りにしました。そこで鶴田さんが同輩の八十肇さんに向つて、戦争体験者はお伽噺を語りすぎてゐるんじゃないか、たしかに生死を共にすれば普通の友情とは違ふけれども、いいことばかりを言わないで、もっと本当のことを話さなくちゃいけないんじゃないか、つて言うんです。終つてから鶴田さんが、山田は俺を変えようと思つてゐる、つて笑つてたそうですけど（笑）、ぼくには何も言わずに一字も変えずにせりふを言つてくださいました」

山田さんが松竹の助監督だったころ、鶴田浩二はもう松竹を出ていて、接点はなかったという。

「若旦那シリーズとかに出ていらして、のつぺりした色男でなかなかよかった。今度はあいう鶴田さんを描きたいと思つて、書いたのが『シャツの店』。オーダーシャツの職人の役ですが、ミシンを踏む姿一つにしてもよくて……二枚目俳優の年老いた姿には、甘さと艶と哀愁があつて素敵でした。鶴田さんはお説教ばかりじゃないということを証明したかった。バーのカラオケで『傷だらけの人生』を歌つて貰つて、NHKにオトシマエもつけたし（笑）。でも終りのころは相当お体がよくなくて、打上げのときに外まで送つたら、このまま入院するけど、どうも有難う、つて握手してくれて、それが最後でした」

もう一人、山田さんにとつての大事な俳優は笠智衆だろう。

『ながらえ』『冬構え』『今朝の秋』など、しみじみとした山田ドラマの名作に主演している。

「ぼくが助監時代、笠さん呼びに行ったら、笠さんと佐分利信さんが和服姿で撮影所の外で石油缶の炭火にあたっていていらしたんです。その姿がよくて、ずっと忘れられずにいてね、いつか笠さん主演で書きたい、と思ってた。『ながらえ』は、病妻を病院に残して、息子夫婦と遠くへ行った老人が、どうしても奥さんに会いたくて汽車に乗るけど、途中の駅で検札係に金がなくて降ろされてしまう。その土地の宿屋の主人が宇野重吉さんで、時計をカタにお金を貸してほしい、って笠さんが頼むんだけど、ドラマの収録が終って民藝に帰った宇野さんが、いくらこっちが技巧をこらしても、あの人はブーツと出ていて勝っちゃうんだ、と言ったそうで、これは嬉しい話でしたね。もちろん宇野さんも名演技でしたよ」

『冬構え』は沢村貞子との共演だった。笠さんは一人旅と思った老婦人と同宿してナンパムードになるが、実は明日夫と落合うことになっている、と謝られる場面が印象的だった。「自殺もできなくて、孤独をかみしめて、東北の旅館で絨毯に手を突いて笠さんが泣く場面があるんです。ある日スタジオへ行ったら、笠さんが泣かないと言ってる、っていうんですよ。小津安二郎監督の『晩春』のラストシーンで、リングをむきながら泣いてくれと言われたときでさえ、どうしても泣けないって断わったんだから、ここで泣くわけにいいかない、って。そこをぼくが膝づめでおねがいして、泣かない熊本の男が泣くからいいんですよ、って言ったら、わかりました、泣きましよう、って、眼の下にハッ力をつけて泣いてくれた。これは名誉なことだと、そのとき嬉しかったんですけど、あとで考えると、ぼくが若気の至りで、やっぱり泣かないほうが深い芝居になったかもしれない。笠さんを

主役にしたいばかりに年寄りのことはずいぶん研究したつもりだったんですけどね」

『今朝の秋』は、別れた妻役で杉村春子が共演した。壮年の息子（杉浦直樹）が癌に侵されると、老いた父は病院を脱出させて自分の別荘へ連れて行き、心静かな日々を共にする。

「笠さんが亡くなる三年くらい前のことで、もう夏は蓼科の自分の別荘で静かに過したい、とおっしゃるので、じゃあ蓼科を舞台に、って（笑）。そういうときになると相当エゴイストだね。でも笠さん専門の人をつけて、大事にケアして貰いました。ドラマで息子が亡くなると、東京で居酒屋をしてる杉村さんがお線香を上げに来る。どうだ、お前もここで暮さないか、って笠さんが言うと、あたし、ネオンのないところはダメなのよ、また来るわ、って、杉村さんがタクシーに乗って、さよなら、さよなら、と淡々と別れるシーン。これがテレビドラマを見る人たちにとっても、笠さんとのお別れでした。その後、加藤嘉さん

のお葬式のとときに、杉村さんがスツと近寄っていらして、あたしね、テレビであんなに褒められたの初めて、ありがとうっておっしゃった。とても感動しました」

こういうのを作者冥利というのだろう。

「とにかくお年寄りというのは魅力がありますからねえ。あんなに輝いてた人が今は弱ってらして、でもポジションを得ればこれだけ輝くんだ、というのを見るのは嬉しいことです」

これからもそういう大人のドラマをたくさん観たいし、『弥太郎さんの話』や『丘の上の向日葵』のようなユニークな小説もいっぱい読みたい。

（おわり）



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。  
どしどし編集部にお寄せ下さい。

# 浄土誌上句会

FORUM  
浄土の広場

●遊

〔特選〕誘蛾灯夜遊びの児の影ばかり

鳥羽 梓

田畑というより、庭や町なかの小公園を思  
い浮かべるのがよからう。夜といっても宵の  
口だろうし、あるいは自分の子供の頃を思い  
だしているのかも知れない。街灯に集まる昆  
虫にたもを持って出たりしたことなどを。

〔佳作〕水遊びに刻を忘れし子がふたり

中島富士子

若葉風遊び疲れて背に眠る

増田 尚久

天道虫草に遊ぶを手のひらに

吉崎美和子

●半

〔特選〕半夏生微熱の残る盤陀鐔

和田 仁

季語から見ると水辺での作業だろうか。溶  
接というには小さい仕事である。一服したあ  
ともう終わりにしようか、もう少し片付けよ

うか。こてはまだ少し熱を持っている。「微熱」とは人間くさい扱いである。

〔佳作〕 半時をうつつにいたり閑古鳥

佐藤 雅子

島の子の半裸で遊ぶ浜辺かな

浜口 佳春

仰ぎみる弥陀の半眼走り梅雨

三溪みずち

●自由題

〔特選〕 黒鯛が一匹釣れて孫五人

柏木 貞華

夕食のおかずは任せておけなどと言って、家を出たのだろう。一家の分くらい軽いものだと思った結果が黒鯛一匹である。魚屋で買って帰るといふ手もあるのだが、さて。五人の孫の顔がちらちらする。

〔佳作〕 睡蓮の陰にぷくりと物の息

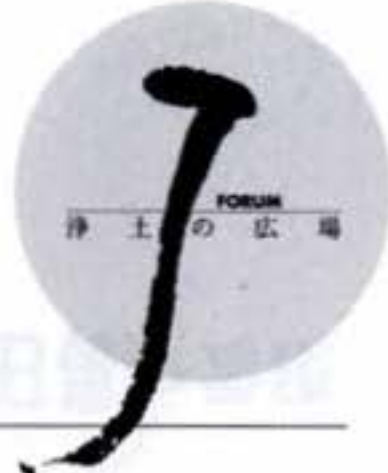
井村 善也

土踏まず孫に踏まして昼寝かな

中村 真一

遠蛙闇がしつとりしてきたる

池田 伊吹



## 遊

海暮れて螢火ひとつ遊びをり 河合富美枝  
秋立つや和菓子つくって遊ぶ午後 金谷 友江  
白秋や湾遊式の船大さ 片桐てい女  
亡き母と遊びし蚊帳に雷の音 飯島 英徳  
磯蟹と遊びつかるる日曜日 工藤 浄真  
遊行寺へ躍りゆくなり夏の蝶 佐藤 雅子  
羽抜鶏仕草笑える砂遊び 浜口 佳春  
公園の遊具の塗り替え夏に入る 山口 信子  
遊牧の牛に夏日のきらめけり 増田 信子  
短日や遊山の疲れ引きずりて 井村 善也  
遊歩道鴟が涼を運び来ぬ 石原 新

## 半

資源保護採取半ばの海胆の山 工藤 浄真  
堂落成の揃ひ半纏風薫る 中島富士子  
秋風や半裸のほてい坐りをり 金谷 友江  
半熟にほどよき卵梅雨に入る 河合富美枝  
秋愁やむかし試験の藁半紙 片桐てい女  
紫陽花のみな揺れている一時半 鈴木真理子  
半眼の兵逝きし夏の朝 鈴木 純子  
半分の半分のメロンが揺れる 油木 掉  
ひと息に半蔵門で蚊を潰す 濱野 東人  
半分は鯖の味噌煮となりけり 目黒 裕  
半身は獣の神や茂りけり 十条 苑を

## 自由題

噴水の繚乱風の走りけり 中島富士子  
傷口のつぶやき梅雨入り近きかな 片桐てい女  
緑陰に読むひとときの歎異抄 河合富美枝  
計画のやうやく実り紅葉狩 金谷 友江  
搗くことのなき半鐘や百合匂ふ 佐藤 雅子  
鶏の卵ひろえり夏木立 目黒 裕  
荒れ寺の羅漢の足にまくわうり 中嶋 出  
梅雨曇り母屋に光るカレーパン 濱野 東人  
梅雨晴間体操服の白を干す 千駄木敏郎

## 浄土誌上句会のお知らせ

### 兼題

(季語ではありません)

## 字山自由題

締切・二〇〇七年九月二十日

発表・『浄土』二〇〇七年十二月号

選者・増田河郎子(『南風』主宰)

### 応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

●葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

### 宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内  
月刊『浄土』誌上句会係

# さっちゃんねネッ

43

かい目

かまち♡ふしろう



## 編集後記

卒塔婆に赤子泣きたる野分かな 岱潤

何気なく法話のネタにでもと思い購入した、五木寛之氏の『林住期』という本を、先日ようやく読む時間を得た。

古代インドの考え方として、人間の一生を四期に分けることを理想とした。学生期、言うまでもなく様々なことを学ぶ時期。家住期、仕事をし、経済活動をするることによって家族を養い社会に貢献する時期。林住期、ひとりになって自分自身を見つめ、旅をし、いわば人生を見つめ直す時期。そして遊行期、悟りを開くための時期の四期である。

このようなことは知識としては当然知っていたが、五木氏の次の言葉に目を丸

くした。「五十歳からの林住期を如何に人生の黄金期として謳歌するかが一番の問題である」。だとすればもうとつくに自分自身が林住期に入っていることになる。五十代初期、まだまだバリバリの現役と思っていたし、僧侶の世界ではまだまだ若年者とさえ思っていたのに、林住期といわれ愕然としてしまった。同期の者に話をする、「よせよせ、まだ蓄えなどしてないよ」と笑っていた。

先日のお施餓鬼会とき、妻が「あなたが導師をつとめられるのも、あと二十回くらいかもね」という言葉に、「もつと少ないかもね」と返してしまった。

人生でするべきことは何かを、考える時期に来ているのかも知れない。(長)

## 雑誌『浄土』 特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)  
巖谷勝正(目黒・祐天寺)  
大江田博導(仙台・西方寺)  
北山大超(焼津・光心寺)  
加藤亮哉(五反田・専修寺)  
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)  
桑原恒久(川越・蓮馨寺)  
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)  
佐藤成順(品川・願行寺)  
佐藤良純(小石川・光圓寺)  
東海林良雲(塩釜・雲上寺)  
須藤隆仙(函館・称名寺)  
高口恭行(大阪・一心寺)  
田中光成(町田・養運寺)  
中島真成(青山・梅窓院)  
中村康雅(清水・実相寺)  
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)  
野上智徳(静岡・宝台院)  
藤田得三(鴻巣・勝願寺)  
堀田卓爾(静岡・華陽院)  
本多義敬(両国・回向院)  
真野龍海(芝・天光院)  
脳博之(網代・教安寺)  
水科善隆(長野・寛慶寺)  
宮林昭彦(大本山・光明寺)  
宮林雄彦(横浜・大光院)  
山田和雄(諏訪・貞松院)  
(敬称略・五十音順)

編集チーフ  
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

編集顧問

大室了皓

浄土

七十三巻九月号 頒価六百円  
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷

平成十九年 八月二十日

発行

平成十九年 九月一日

発行人

真野龍海

編集人

佐藤良純

印刷所

株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三五七八)六九四七

FAX〇三(三五七八)七〇三六

振替〇〇一八〇・八・八二八七

ホームページ <http://gekkkan-jodo.info>

# 超ちよう世せ無む倫りん

世を超えて、倫なしともがら  
無量寿経

亜細亜大学講師  
東京高輪・光福寺住職

生野善應

優れた技量は、  
時代・民族を超えて伝承する。

「竹屋町」とは特異な技法で文様を縫い表した織物で、夏用の袈裟けさに見られます。

京都市を東西に結ぶ丸太町通を一本下ると、竹屋町通があります。ここには、衣棚ころもだなといった場所が残っていて、昔、中国の袈裟作りの技術者の仕事場があった国際通りでした。竹屋町裂きれとは、「紗しゃの切地に金銀系や彩系を地緯じぬきに沿って縫い取

りした技法で文様を縫い表した裂きれ」（広辞苑）ですが、その技法を受け継ぐ職人はいないそうです。

故人の遺徳を偲ぶ追善の時期も国際的です。初七日から四十九日までの忌日はインドに由来し、一周忌、三回忌は中国で、七、十三回忌は日本で平安時代に始まり、十七回忌以降は鎌倉時代以後です。百ヶ日は胡こ（中国）の習俗。

# 法然上人鑽仰会の

# 本

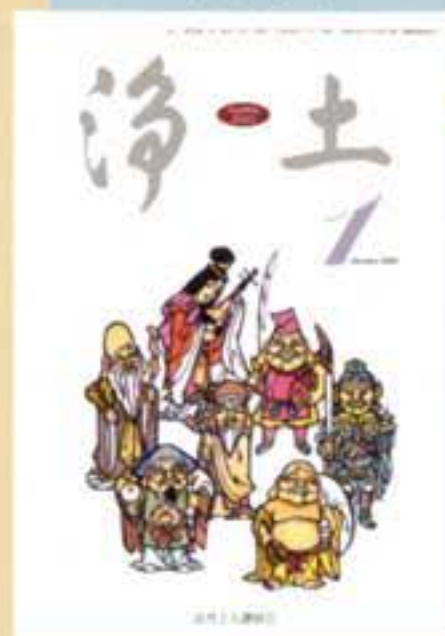


『念佛讀本』完全復刻版  
1,600円



『差出人は法然さん』  
600円

月刊「浄土」  
バックナンバー



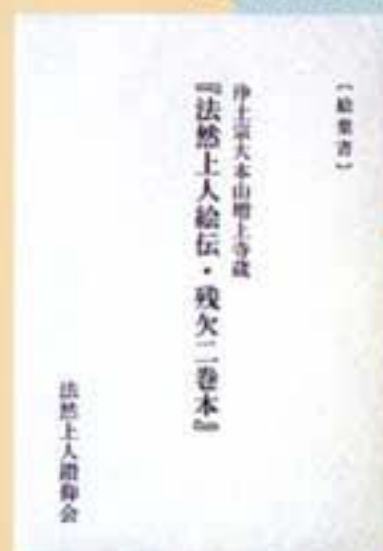
※額装寸法 47 × 59 cm



選擇集十六章之図(額入り)  
『選擇集絵解き物語』含む  
20,000円 (別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」  
(8枚セット) 800円



委託販売

増補版『浄土への道  
法然上人法語抄』  
1,000円



「ブッダ  
知れば知るほど」  
1,000円



※浄土宗大本山増上寺蔵  
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、  
当会へお申し込みください。なお、月  
刊「浄土」を除き価格に送料は含まれ  
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会  
電話 / 03-3578-6947  
FAX / 03-3578-7036